

発電設備専門技術者 インタビュー ③4

濱野 正浩 さん（四国機器株式会社）

シーケンス制御も発電設備技術者として覚えなければならない技術でした。発電設備自体の始動・停止の制御は勿論のこと、受変電側の停復電制御も把握しておかなくてはなりません。「重電メーカーさんにはよく教わりました。CADも含め必要に迫られマスターしたって感じです。」と、貪欲に技術を吸収した若手時代を顧みます。

施工技術者として四国で施設を手掛ける

平成9年、濱野さん29歳の時、同社に大型の施工案件が持ち込まれます。高松市内の商業施設の常用発電設備（ディーゼル機関駆動1,250kVA×4基）の新設でした。施主の旗艦店舗にして当時四国最大のショッピングセンターの建設計画。施主側の入れ込みは発電設備にも反映され、ディーゼル機関の冷却系統の多重化など、信頼性を期すための措置が施された計画でした。濱野さんは現場代理人として、搬入据付全般を取り仕切ります。与えられた工期は3ヶ月でしたが、順調に作業は進み、予定通り発電設備を納めることができました。

本州と四国を結ぶ交通の要衝であり、四国の政治経済の中心である高松市。同市の中心部を東西に貫いている観光通りに、濱野正浩さん（49歳）が勤務されている四国機器株式会社があります。

取材中終始にこやかな笑顔で応対して頂いた濱野さん。30年近くの自家用発電設備専門技術者人生で得たエピソードの一端を披露してもらいました。

貪欲に技術を吸収した若手時代

濱野さんは現在は高松市に編入された、旧庵治町の生まれ。漁業が盛んな土地で濱野さんも代々漁師の家系でした。幼い頃から、漁船の整備をする同社の技術員の姿を見かけていたそうです。

高等専門学校の機械科を卒業後、平成元年に入社。同期の多くが東京や大阪の大手企業に就職する中、濱野さんは地元に残りました。

入社後、早速上司の指導の下、発電設備の設計補助や試運転調整から発電設備技術者としての人生がスタートします。ちょうどその頃、施工業界においてはCAD（コンピューターによる設計支援）が本格的に普及。課で最も若かった濱野さんは、社内で真っ先にCADを習得します。程無くしてゼネコンからもCADデータでの図面提出の要求がなされるようになり、業務効率化のみならず、取引先との信頼構築に寄与したと濱野さんは言います。



発電設備の揚重作業

「火入れ式」も無事終わり、翌年秋の施設のプレオープンの日。朝早くから列をなして開店を待つ家族連れの姿を見た時、濱野さんは地元で生まれ育ち、建設に携わった一人として、非常に晴れ晴れとした気持ちになったと言います。



大型煙突の据付光景（平成13年頃）

竣工後の設備の点検整備も手掛け、現在に至るまで施主との太い信頼関係を構築している、同社の興隆に非常に寄与した物件でした。

コージェネレーションシステムの設計施工で思い入れ深い物件の一つ。平成13年に竣工した高知市の体育施設の常用防災兼用発電設備（ディーゼル機関駆動187.5kVA×1基）。エンジンの廃熱は、国体開催のため建設することとなった温水プールに利用する設計でした。廃熱利用率を向上させるため、熱交換器・循環ポンプの選定や、運転パターンによる熱回収の最適な流量計算など、設計事務所やゼネコンとの打ち合わせでは、機械と電気の両方に精通している濱野さんが議論をリードします。「省エネ・環境がテーマでしたので、利用効率を少しでも向上すべく、設計面では色々とお手伝いさせて頂きました」と当時を振り返ります。

施工面においても、これまでの常用発電設備の経験から得た協力会社とのチームワークにより、滞り無く完工することができました。太陽光などの自然エネルギーも多く活用された先駆的施設として、建築業界の評価も高い物件でした。

発電設備専門技術者は機械と電気に精進すべし

平成27年に濱野さんは総勢75名を率いるエンジンシステム営業本部の本部長となり、アフターサービス部門も含めた総責任者となりました。人材育成も担う立場として、求める技術者についてこう語ります。「当社へはエンジンが好きで入社してくる者がほとんど。そのためか電気分野は遠慮しがち。でもお客様から見れば電気も機械も関係ない。発電設備は勿論、受変電設備にも踏み込んで電気の流れを考えて欲しいね」と、自身のこれまでの経験を踏まえ、日頃から部下達に語りかけているとのこと。

また、具体的な育成方法についてこう話されました。「施主様からの発電設備に関する問い合わせで

は、自家用発電設備専門技術者のテキストの内容は判り易く解説されていることからテキストを用いて回答するよう指導しております。また、専門技術者講習試験の資格取得を活用し、例えば船用エンジン担当の社員も発電設備を取り扱うように教育するとか、ジョブローテーションも必要かと考えています。事業部としての総合力を上げていきたいですね。」

四国の住民の生活をこれからも支え続ける

濱野さんには若手時代に体験した忘れ難い出来事があります。入社5年目、高松港から数km先に浮かぶ大島への、電力会社の海底ケーブルが切断され、全島が停電となる事故が発生しました。同社は昭和57年、島の大部分を占める国立療養所へ非常用自家発電設備（以下「自家発」。ディーゼル機関駆動300kVA×1基）を納入していました。しかし、同社とは保守契約がなされていなかったこともあり、停電により自家発が始動したものの、その後ラジエータのファンベルトが切れ、停止し電力が供給できなくなったそうです。濱野さんは施設管理者や電力会社との電話対応に追われます。「入所者の生活に直結する事態でした。先輩方が電力会社の船で島に向かい、無事復旧しました。」

その後、国立療養所へは同社により自家発更新工事が行われ、現在はメンテナンスも定期的になされています。保全の大切さを教えてくれた事例でした。



発電設備の搬入光景（奥に見えるのが高松市街）

濱野さんは、今後の取り組みとして、四国中に設置された自家発のメンテナンスに注力していきたいと語ります。発電設備専門技術者が世代交代していくその先を見据え、最後にこう強調されました。

「協力会社とも連携し、四国の住民の生活を支える専門技術者を育てていきたいですね。良い人材を確保しこれまで育ててくれた地元への恩返しができると思っています。」